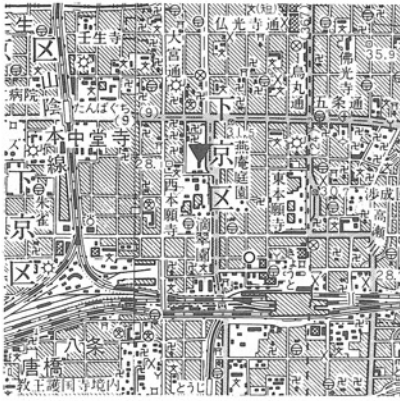


京都・平安京跡左京七条二坊八町及び
本圀寺^{ほんこくじ}

- 1 所在地 京都市下京区堀川通花屋町上ル柿本町他
- 2 調査期間 一九九五年（平7）一月～六月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 上村和直・近藤知子
- 5 遺跡の種類 都城跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部・京都東南部)

調査地点は平安京左京七条二坊八町及び本圀寺に該当し、現在は西本願寺境内地にあたる。
貞和元年（一三四五）に創建された本圀寺は、堀川小路、大宮大路、七条大路、六条坊門小路を境界とする合計一二町の広大な寺域を有し、京都における日蓮宗寺院の中核的位置を占めていたとされる。天文五年

（二五三六）の法華の乱に敗れて焼亡し、一時は堺に逃れるが、細川晴元により再建された。天正一九年（二五九二）、本願寺が移転してきた際に寺地の南二町分を減ぜられたものの、豊臣秀吉らの援助により再び繁栄した。その後天明八年（二七八八）の大火でほぼ全焼、一九七一年に山科へ移転して現在に至るが、現存の建物は大火後に再建されたものである。本調査区は本圀寺旧境内の中央やや北寄りに相当する。

また調査地点は平安京左京七条二坊八町の南西部に該当し、仁和寺所蔵古図によると右大将貞保の邸宅があったとされ、さらに東市外町に南接する位置にあたる。

調査では平安時代前期以降、各時期の遺構を多数検出した。このうち調査区東端で南北約三四mにわたって検出した堀は、室町時代



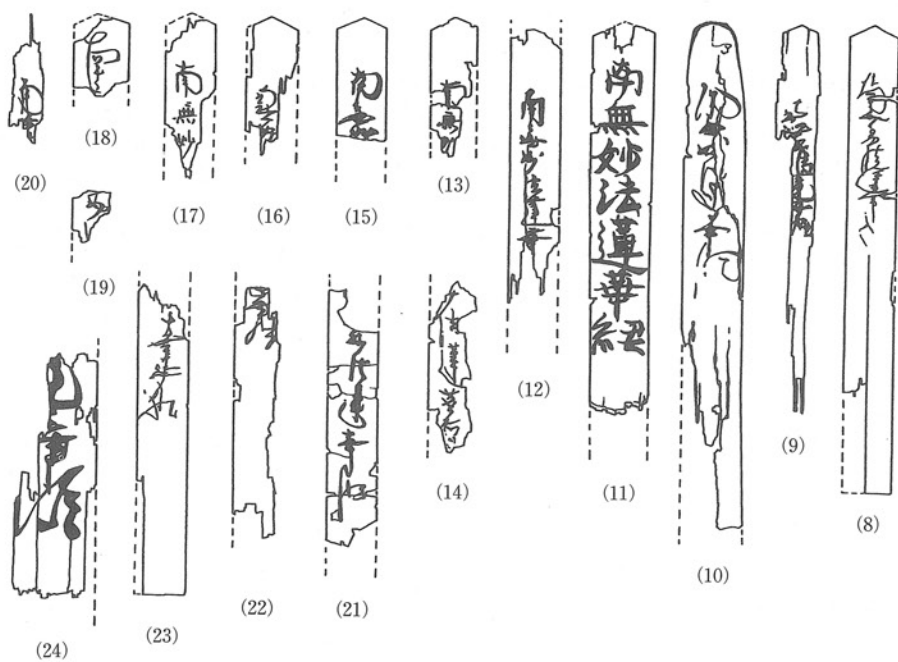
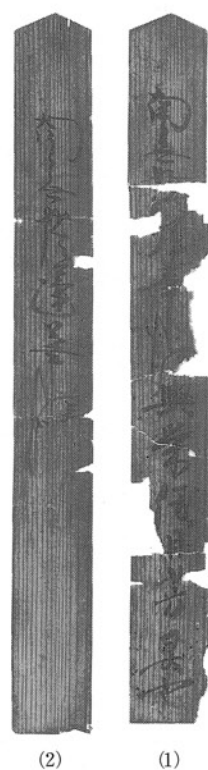
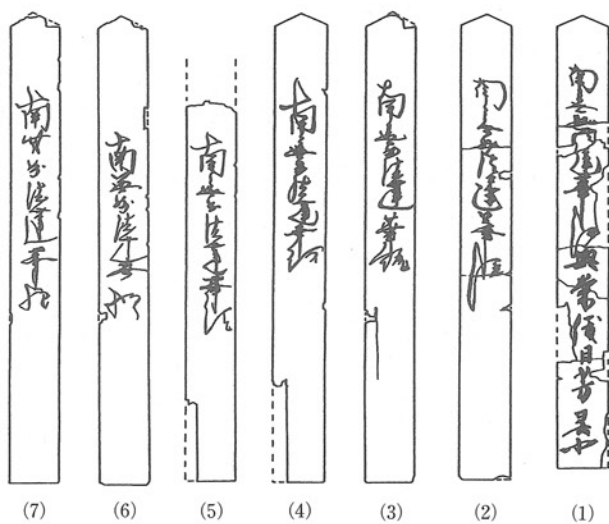
遺構図

から江戸時代末期まで機能しており、本圀寺の東限を示すものと推定できる。堀の検出面での規模は、幅約6m深さ約2mで、断面は逆台形を呈する。同時期の柱穴も多数検出したが、建物などの復原には至らなかった。

また、江戸時代に属する堀状の大型土坑を二基検出した。調査区西端の南北方向の堀状遺構は、検出面での幅約3m深さ約1・2mで、北方は調査区外に延びるが、南端は調査区内で検出した。上層は天明の大火の処理跡と考えられる、焼けた瓦などを大量に放棄した堆積層で埋没していたが、下層には一七世紀に属する粘質砂泥の湿地状堆積があり、木簡はここから東になった状態で出土した。もう一つの堀状遺構は東西方向のもので、両端を調査区内で確認している。

8 木簡の釈文・内容

(6)	〔南無妙法蓮華經〕	310×33×0.25	061
(7)	〔南無妙法蓮華經〕	310×33×0.25	061
(8)	〔南無妙法蓮華經〕	310×33×0.25	061
(9)	〔南無妙法蓮華經〕	(255)×(28)×0.25	061
(10)	〔南無妙法蓮華經〕	(336)×40×0.3	061
(11)	〔南無妙法蓮華經〕	(256)×40×0.5	061
(12)	〔南無妙法蓮華經〕	(182)×33×0.25	061
(13)	〔南無妙法蓮華經〕	(93)×30×0.25	061
(14)	×妙法蓮華經	(110)×(30)×0.25	061
(15)	〔南無妙法蓮華經〕	(82)×33×0.3	061
(16)	〔南無妙法蓮華經〕	(84)×33×0.25	061
(17)	南無妙法蓮華經	(107)×33×0.25	061
(18)	〔無カ〕 南□×	(31)×32×0.5	061
(19)	×妙□×〔法カ〕	(33)×(25)×0.5	061
(1)	〔南無妙法蓮華經〕興栄後月芳霊也〕	305×33×0.25	061
(2)	〔南無妙法蓮華經〕	310×33×0.25	061
(3)	〔南無妙法蓮華經〕	310×32.5×0.25	061
(4)	〔南無妙法蓮華經〕	310×33×0.25	061
(5)	〔南無妙法蓮華經〕	(251)×33×0.25	061



(20)	南無×	(85)×(22)×0.5	061
(21)	×妙法蓮華經	(170)×33×0.3	061
(22)	×華經	(167)×(30)×0.5	061
(23)	×蓮華經	(205)×33×0.25	061
(24)	×蓮華經	(163)×(54)×0.6	061

出土した木簡はすべて厚さ〇・二～〇・六mmの薄い短冊型の板に「南無妙法蓮華經」の題目を墨書したものである。幅は三・三cmか四・〇cmのいずれかで、一点のみ五・四cmのものがある。長さは完形のものでほぼ三～三四cmあり、上端は山型に尖らせる。墨書の確認できる板材が約一〇〇点、このほか墨書のない同様の材が約三〇点、破損した削屑のような破片が数十点ある。いずれも片面のみに「南無妙法蓮華經」と一行に書くが、(1)には題目以外に別の文言が書かれていた。

筆跡は一五～二〇種類ほどあり、例えば(1)(2)と同じ筆跡のものが約一五枚出土しているように、複数枚が同一の手によって書かれたことがわかる。(10)と同じ筆跡のものは破片も含めて約五枚あるが、いずれも上端部が黒く焦げていた。(13)と(14)、(18)と(19)はそれぞれ同一個体ではないが、同じ手によるものと思われる。

「南無妙法蓮華經」の句から日蓮宗、すなわち本圀寺に関係するもので、いわゆる笹塔婆に相当するものであろう。

9 関係文献

(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成七年度京都市埋蔵文化財調査概要』(一九九七年)
(近藤知子)